

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 16日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤（C）

研究期間：2009年度～2011年度

課題番号：21510253

研究課題名（和文） 口述史による在日済州島出身者の生活過程に関する研究

研究課題名（英文） A Study of Aural History about daily life of Jeju-Islanders in Japan

研究代表者

高村 竜平（TAKAMURA Ryohei）

秋田大学 教育文化学部・准教授

研究者番号：30425128

研究成果の概要（和文）：

本研究は、在日朝鮮人の中でも戦前から持続的な渡日があり、経済史・社会史・政治史に関心を持たれてきた済州島出身者について、口述史に基づく生活史調査を行うものである。大阪を中心に、東京・東北などの地域におけるインタビュー調査と、出身地およびかつての居住地に関する実地踏査を行った。また、インタビュー調査の資料の一部を日本および韓国において公刊した。さらに、この資料を活用して学会発表を行った。

研究成果の概要（英文）：

This is the study on daily lives of Jeju-Islander in Japan through the interviews with them, the aural history approach. The main informants are settlers in Osaka, but some are in Tokyo and Tohoku. We also visit the related places on these interviews in Japan and Jeju-do, the informants' homeland. Some records of them were published in Japanese and Korean, and we held some aural presentation in two academic conferences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：現代史

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：在日朝鮮人、口述史、済州島、4・3事件、マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

在日朝鮮人、とくに本研究が対象とする済州島出身者については、歴史学・社会学・文学などの諸分野において多くの研究が蓄積されていた。それは、済州島民が渡日当初より出身地や親族関係などによるネットワークをもっており、近年までそれらネットワークが機能していたため、研究者の関心をひき

つけたという事情がある。しかしそれら研究の多くは、戦前の渡日過程、製造業や漁業における労働過程、政治運動に関する研究が中心で、戦中・終戦直後や戦後の渡日過程や生活状況に関する研究は限られていた。それは、朝鮮半島の分断とその後の南北対立、さらに日本国内での民団と総連との対立という政治状況の影響や、とくに済州島の場合 1948

年を中心とする「4・3事件」により、渡日や生活状況について語ることで自体がタブーである時期がつついたことが大きい。1990年代以降、この事件のみなおしが韓国で進んだことにより、ようやくこの時期についての研究が進展してきた。本研究もまた、このような流れをくんだものである。

2. 研究の目的

本研究は、在日済州島出身者の戦前・戦後にかけての歴史を、とくにインタビューによる生活史調査という手法によってあきらかにするものである。文献資料によっては解明することが困難な、在日済州島出身者の生活史を調査することで、日本と朝鮮半島の戦後史、ことに近年注目を集めている「4・3事件」についての基礎資料を蓄積することができることを考えてのことである。また在日外国人の戦後日本における生活状況についても、今日では知ることが困難な内容を口述によって記録可能になり、移住者の適応過程や、日本における多文化社会の形成のために資することが可能である。

3. 研究の方法

研究参加者はいずれも以前から済州島および在日済州島出身者について、文化人類学・社会学・歴史学などの立場から研究してきたメンバーであり、またその一部は済州島出身者の集住地域に在住している。それにより、これまでのネットワークを生かして話者の紹介を受け、個別に生活史を聞き取った。聞き取った音声データは逐次文字化し、可能なものは編集して公表した。公表に当たっては当事者の許可を得たが、公表に至らない事例もあった。ほとんどの話者は大阪市内あるいはその近辺に在住していたが、一部は他地域の住民であった。

また、生活史の中であらわれる場所に実際に足を運ぶ巡検も実施した。

2009年度

大阪において3名の済州島出身者にインタビュー調査を行った。また、2009年9月12日から20日に済州島を訪問し、1名の4・3事件経験者にインタビュー調査を行ったほか、これまでのインタビュー対象者の出身地などの現地確認作業を行った。この期間中の9月14日には、済州市の(財)済州4・3研究所において口述史の方法論に関する合同ワークショップを開催し、双方のこれまでの調査について検討する場をもうけた。このほか、2009年7月18日-20日には高村・高・鄭が東京で3名のインタビュー調査に参加し、2010年3月21日・23日には高村・高が秋田県及び岩手県において2名のインタビュー調査に参加するなど、大阪以外の地域の済州島

出身者の調査も開始した。2010年3月21日には打ち合わせ会議を開き、2010年度以降の調査予定と成果の発表のための作業分担及びスケジュール確認を行った。

個別の研究活動として、高村は2009年8月には釜山市立図書館において、2010年1月には秋田県公文書館において文献資料調査を行った。

2010年度

大阪において3名の済州島出身者にインタビュー調査を行った。またその前後に、これまでのインタビュー結果のバックデータ収集作業として、現地確認と写真による記録をおこなった。ただし、予定していたインタビューの死亡により調査が不能になったり、3月に宮城県及び岩手県での現地確認を予定していたが大震災により中止になるなどの問題も生じた。このため2011年3月31日には打ち合わせ会議を開き、来年度以降の調査予定と成果の発表のための作業分担及びスケジュール確認を行った。

2011年度

当該年度は研究の最終年度にあたるため、研究成果を還元するための発表および出版活動を中心的な内容とした。口述史調査および現地調査としては、2012年3月に滋賀県能登川町において、もと在日朝鮮人集住地域の实地踏査とインタビュー調査を行った。これは、過年度に行った東北調査に続き、東京・大阪のような大都市とは異なる性格を持つ地域における調査の試みである。またこの際には、滋賀県における民族教育の歴史と現状について、関係者への聞き取り調査と实地踏査も行った。

4. 研究成果

2009年度

高村は韓国全南大学校社会学科のコロキアムに招待され、地域調査の方法論に関して、事例調査の意義について発表した。また高は韓国漢陽大学校の民俗芸能に関するシンポジウムにおいて、鄭は国際高麗学会においてそれぞれ在日コリアンに関する調査に基づいた研究発表を行った。

2010年度

2010年10月7日から12日に韓国・済州特別自治道を訪問し、この期間中の10月8-9日には、済州市の(財)済州4・3研究所主催(韓国口述史学会後援)によるシンポジウム「記憶の口述と歴史-4・3の経験と在日済州人、そして韓国現代史」に参加し、高正子・鄭雅英が本研究の成果を発表したほか、高村がコメンテーターをつとめた。一方、既存のデータの文字化及び原稿化を進め、連携

研究者藤永壯の所属する大阪産業大学の紀要に発表された。

さらに、鄭雅英および高正子が編者として関わった『在日コリアン辞典』が出版され、両名はもちろん高村も項目執筆者として参加した。この際各自が、口述史調査資料を活用した。

2011 年度

琉球大学の「人の移動と 21 世紀のグローバル社会」プロジェクトでのシンポジウム（2011 年 7 月）に鄭雅英と高正子が参加し、また朝鮮史研究会大会（2011 年 10 月）での在日済州島出身者についての共同発表パネルに高村竜平と鄭雅英が参加した。それぞれの発表において各自が本研究で蓄積した資料を活用し、高村は 4・3 事件に関する口述史調査の意義について、鄭雅英は口述史に見られる済州島での教育について、高正子は女性たちの生活戦略について発表した。

さらに、これまでの成果の一部を韓国語に翻訳し、ソウルのソニン出版社より単行本『安住の地を探して-在日済州島人の生活史 1』として出版した。今後も、研究者の所属大学の紀要を中心に、口述記録を発表する予定である。

以上のように、これまでは個別のライフヒストリーの公表を中心に成果を発表してきたが、これは、まずなによりも基礎資料としての口述史記録を利用可能な形で蓄積することが重要であると考えた為である。今後は、個別記録の公表に加えて、研究者個々が研究の資料として活用して論文を公表していく予定である。最終年度における、琉球大学および朝鮮史研究会での発表はその足がかりとなるものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①藤永 壯，高 正子，伊地知 紀子，鄭 雅英，皇甫 佳英，高村 竜平，村上 尚子，福本 拓，高 誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（9・下）：梁寿玉さんへのインタビュー記録、大阪産業大学論集人文・社会科学編 査読無、12 巻、2011、111-127

②高 正子、在日コリアンたちが伝承する民族芸術の変遷、コリア学国際学術大会論文集、査読無、10 号、2011、656-662

③高 正子、日本における在日コリアンの伝統芸能の継承（韓国語）、ウリチュム研究、

査読有、10 号、2010、175-190

④高 正子、大阪済州人の祈り—ある済州島出身女性の事例から—、コリアンコミュニティ研究、査読有、創刊号、2011、15-20

⑤高 正子、〈民俗〉の発見から「伝統文化」の誕生へ、現代韓国朝鮮研究、査読有、10 号、2010、89-99

⑥高 正子、韓国文化の発信地としての大阪生野区の 코리아タウン、グローバルコンテンツ、査読有、5 号、2010、87-120

⑦鄭 雅英、在日同胞社会と韓国四月革命—韓国民台形学生青年運動を中心に（韓国語）、コリア学国際学術討論会論文集（人文編）、査読無、9 号、2009、391-415

〔学会発表〕（計 13 件）

①高村 竜平、在日済州島出身者の口述史と四・三事件、朝鮮史研究会第 48 回大会パネル 2「解放後・在日済州島出身者の生活史」、2011 年 10 月 23 日、立命館大学衣笠キャンパス

②鄭 雅英、済州島出身者と学校教育、朝鮮史研究会第 48 回大会パネル 2「解放後・在日済州島出身者の生活史」、2011 年 10 月 23 日、立命館大学衣笠キャンパス

④高 正子、義鷗における韓国人と朝鮮族の関係について、朝鮮族学会関西支部第 2 回大会、2011 年 7 月 30 日、大阪経済法科大学

⑤高 正子、4・3 事件後に日本に渡ってきた女性たちの生活戦略—解放後日本に渡ってきた在日済州島人たちの生活史調査から—、琉球大学「人の移動と 21 世紀のグローバル社会」プロジェクトシンポジウム「東アジア“間地方交流”の過去と現在-済州と沖縄を中心にして-」、2011 年 7 月 10 日、琉球大学

⑥高村 竜平、済州島と日本における「非通常の死」に対する対応、済州学会 第 32 回研究大会、2010 年 11 月 19 日、済州商工会議所

⑦高 正子、解放直後の在日済州島出身者の生活史調査の現状と課題、済州四・三 62 周年記念国際シンポジウム『記憶の口述と歴史』、2010 年 10 月 8 日、済州大学校国際交流会館

⑧鄭 雅英、日本の 4・3 事件追悼事業と在日同胞、済州四・三 62 周年記念国際シンポ

ジウム『記憶の口述と歴史』、2010年10月8日、済州大学校国際交流会館

⑨高 正子、大阪生野区 코리아タウンと韓国の食べ物、そして韓流、グローバル文化コンテンツ学会国際学術大会『코리아タウンと韓流』、2010年10月20日、韓国外国語大学

⑩高 正子、在日コリアンの民族文化の継承、日本文化人類学会、2010年6月13日、立教大学

⑪高村 竜平、事例研究の意義は何か？（韓国語）、全南大学校社会学科BK21 事業「創造的地域専門家の育成」第2回コロキウム、2009年8月27日、韓国・全南大学校人文科学大学

⑫高 正子、日本における在日コリアンの伝統芸能の伝承（韓国語）、芸術的言説から見た韓・中・日の地域文化の再照明—京畿道編、2009年10月10日、漢陽大学校ウリチュム研究所

⑬鄭 雅英、在日同胞社会と韓国四月革命—韓国民台形学生青年運動を中心に（韓国語）、国際高麗学会第9回 코리아学国際学術討論会、2009年8月29日、上海・復旦大学

〔図書〕（計1件）

①藤永壮・高正子・鄭雅英・皇甫佳英・伊地知紀子・高村竜平・村上尚子・福本拓・高誠晩、安住の地を求めて—在日済州人生活史1（韓国語）、2012、342

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高村竜平 (TakamuraRyohei)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：30425128

(2) 研究分担者

鄭 雅英 (Chung Ah Young)
立命館大学・経営学部・教授
研究者番号：3431531127

高 正子 (KoJeongJa)
天理大学・国際学部・講師
研究者番号：3460221122

(3) 連携研究者

藤永 壮 (Fujinaga Takeshi)

大阪産業大学・人間環境学部・教授
研究者番号：00247876

伊地知紀子 (Ijichi Noriko)
大阪市立大学・文学研究科・准教授
研究者番号：40332829